

第2講 発達と社会化、子どもと博物館、子どもの博物館

確認キー 5304

1. 発達と社会化

1) 発達とは

はったつ【発達】

- ① 発育して完全な形態に達すること。
- ② 進歩発展すること。「一した文明」
- ③ 規模が次第に大きくなること。「一した低気圧」
- ④ 【心】〔developmentドイツ・Entwicklung〕生体が、時間的経過に伴って形態・技能・行動などを変化させていくこと。また、その過程。

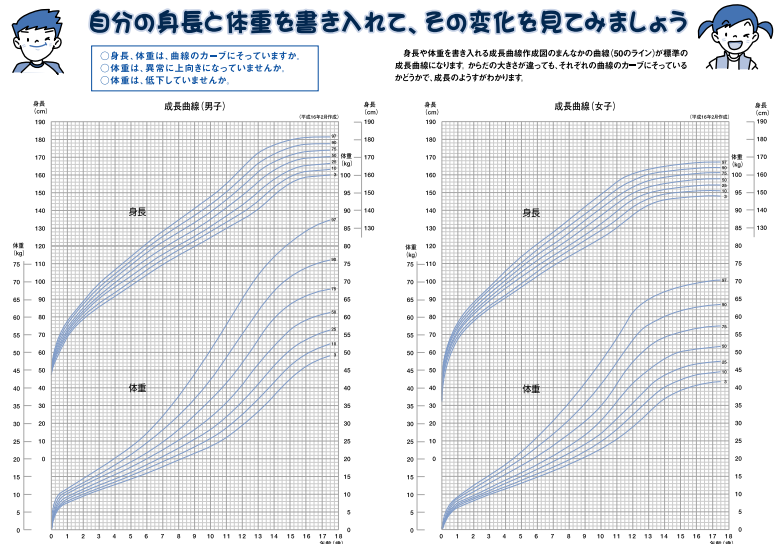
発達は個体の成長（卵から始まる極初期の場合は発生）と言い換え可能。人間の場合、親や他人との関わりなしに成長することはできないので、発達といっても社会関係からの影響が必ずある。

2) 社会化とは

しゃかいか【社会化】

- ① 個人が所属する集団の成員として必要な、規範・価値意識・行動様式を身につけること。
- ② 個人の相互作用によって集団や社会が形成される過程。
- ③ 生産労働や育児などが、私的・個別的なものから共同・集団的なものになること。

社会化は他人との関わりによる行動や考え方、常識の獲得



成長曲線を描いてみましょう（厚労省）より
<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2004/02/dl/s0219-3b.pdf>

2. 身体の発達

1) 身長

日本人18歳（児童福祉法の対象年齢）までの成長曲線。

18歳到達時の平均身長は男子170cm、女子158cm

国民健康・栄養調査 | 厚生労働省

https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kenkou_eiyou_chousa.html

2018年で16-59歳までは各年齢ともおおよそ170cm

学校保健統計調査：文部科学省

https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa05/hoken/1268826.htm

平均身長は平成6-13（1994-2001）年をピークに横ばい



国民健康・栄養調査 14 身長・体重の平均値 | 政府統計の総合窓口
<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003224177>

2) 視力

生まれたばかりの赤ちゃんは明りがぼんやりわかる程度の視力、生後3ヶ月までの赤ちゃんの視力は0.1くらい、乳幼児期には目は軽度の遠視、視力の発達は5歳くらいまでが最も重要な時期、両目でものを見て遠近感を

Philippe Ariès 1914–1984

2) フィリップ・アリエス ~~Jean-Jacques Rousseau, 1712–1778~~

今のような子ども像、子どもらしさは近代にできた、という主張。フランス革命より前は、子どもは小さな大人として描かれていた。『子供の誕生』はそれをヒントに著された

アリエス『子供の誕生』（L'Enfant et la Vie familiale sous l' Ancien Regime, 1960）

フィリップ・アリエス - Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%97%E3%83%BB%E3%82%A2%E3%83%AA%E3%82%A8%E3%82%B9>



3) エリクソン Erik Homburger Erikson, 1902–1994

心理社会的発達理論

年齢	時期	要素	心理的課題	主な関係性	例
生後-	乳児期	希望	基本的信頼 vs. 不信	母親	授乳
18ヵ月-	幼児前期	意思	自律性 vs. 恥、疑惑	両親	トイレトレーニング、更衣の自律
3歳-	幼児後期	目的	積極性 vs. 罪悪感	家族	探検、道具の使用、芸術表現
5歳-	学童期	有能感	勤勉性 vs. 劣等感	地域、学校	学校、スポーツ
13歳-	青年期	忠誠心	同一性 vs. 同一性の拡散	仲間、ロールモデル	社会的関係
20–39歳	成人期	愛	親密性 vs. 孤独	友だち、パートナー	恋愛関係
40–64歳	壮年期	世話	生殖 vs. 自己吸収	家族、同僚	仕事、親の立場
65歳-	老年期	英知	自己統合 vs. 絶望	人類	人生の反響

エリク・H・エリクソン - Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A8%E3%83%AA%E3%82%AF%E3%83%BB%E3%83%BB%E3%82%A8%E3%83%AA%E3%82%AF%E3%82%BD%E3%83%B3>

4) ピアジェ Jean Piaget, 1896–1980

認知発達理論

感覚運動期	0–2歳	言語以前、感覚と運動による認識
前操作期	2–7歳	イメージの形成、言語獲得、自己中心性
具体的操作期	7–12歳	数と量の概念、他者との相互作用
形式的操作期	12歳–	見えないものの推論、他者視点の 思考 施行

【学者紹介】 Jean Piaget - Ylab 東京大学 山内研究室 <https://fukutake.iii.u-tokyo.ac.jp/ylab/2014/10/post-504.html>

ジャン・ピアジェ - Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B8%E3%83%A3%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%83%94%E3%82%A2%E3%82%B8%E3%82%A7>

確認キー 5304 1855から再開

4. 子どもと博物館

1) 子どもの特徴

ここでいう子どもは未就学児から小学生を想定している。子どもの特徴を博物館の視点から記すと、小さな身体、低い視線、弱い力、少ない知識や経験、集団へのなりやすさ、身体バランスの悪さなどがある。とりわけ未就学児の場合、視力の未完成、身体機能や運動神経の未発達、集中持続時間の短さ、があげられ、乳幼児であれば派手な色や正面からの視線を好むなどの傾向もある。展示や教育事業は、これらの特徴を踏まえたうえで展示や教育事業をおこなう必要がある。さらには子どもを対象に据えた子ども博物館を設計する場合もある。子ども博物館や科学館がその例となる。

子どもの特徴を捉えたテレビ番組にNHKのEテレ（教育テレビ）の「おかあさんといっしょ」と「セサミストリート」がある。両者ともに番組は短いコーナーの集成となっている。これを博物館の展示や教育事業にそのまま応用することは難しいが、参考事例として覚えておきたい。

2) 発達への配慮

子どもに向けた展示での配慮は、視線の高さを意識した陳列、押しボタンや操作装置に必要な力の調整、解説文章の漢字の制限やふりがななどが必要となる。これらは心と身体の発達段階への配慮と言い換えることもできる。内容では触れる展示や操作操縦、身体を動かす装置などの体験的要素が好まれる。

経験的には、未就学児の場合、おとな向けに調整された日常生活が不便で苦痛を感じているため、子ども向けアレンジされたイスや机があるだけでうれしいように見える。

5. 子ども居場所と博物館

1) 学習場所としての博物館

おとなが期待する子どもによる博物館の利用に学習がある。この場合、博物館に期待されているのは学校では得られない知識や体験である。具体的には、豊富な実物資料、高度な実験や観察、精巧なレプリカ、大規模あるいは高価な展示装置などであり、期待に応えるには資料や設備の充実が必要となる。

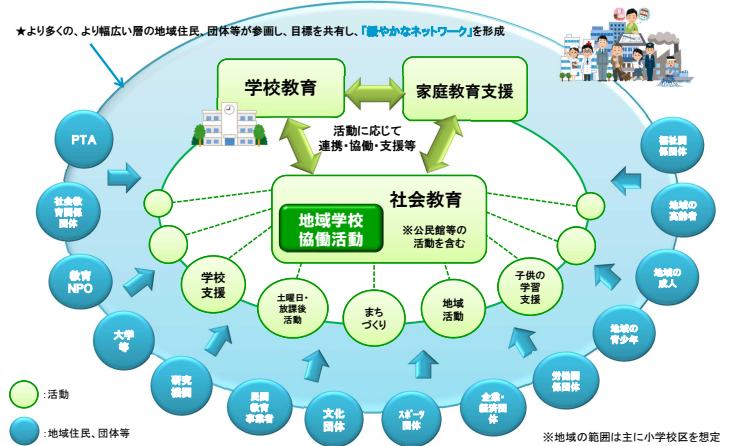


上から
色鮮やかな展示装置が置かれた展示室（大阪市立科学館）
触る、動く、動かす、体験が好まれる（福岡市科学館）
身体能力も考慮する必要がある（京都市青少年科学センター）
ディスカバリーコーナー（福岡県立恐竜博物館）

◎ 次代を担う子供に対して、どのような資質を育むのかという目標を共有し、地域社会と学校が協働。
 ◎ 従来の地域団体だけではなく、新しいつながりによる地域の教育力の再生・充実は、地域課題解決等に向けた連携・協働につながり、持続可能な地域社会の源となる。

2) 子どもの居場所としての博物館

日本の小学校の隠れた大きな役割に託児所機能がある。しかし託児機能は週末や放課後には失われ、その時間には子どもの居場所は家庭や友人宅、習い事や塾、公園などとなる。しかし現在では友人宅に行くにも予約が必要、公園は未就学児や老人の場所など、学童期の子どもの居場所となりにくくある。塾や習い事も所属していない場合は居場所になり得ない。とりわけ2002年度から学校週5日制が実施されたことは大きな契機となった。



地域全体で未来を担う子供たちの成長を支える仕組み（概念図）

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/054/siryo/_icsFiles/afieldfile/2015/11/05/1362869_05_1.pdf

そこで、博物館もおとなの目が行き届いた健全で学習可能な子どもの居場所としての期待が高まった。悪い意味での「たまり場」になるのではという懸念のなか小中学生や高校生の入館料無料化が始まり、文部科学省では「子どもの居場所」を確保する施策や補助事業を進め、博物館も社会教育機関として加わった。同省の事業は「学校と地域でつくる学びの未来」というウェブサイトに関連事業が網羅されている。

これらの事業は学校教育と社会教育、そして住民が一体となって子どもを見守る、教育を進めるという考えを具体化したものである。博物館の参加は、社会教育機関としての役割からである。本来機能である資料の収集や保存という面ではない。

文部科学省「学校と地域でつくる学びの未来」 <http://manabi-mirai.mext.go.jp/>

「放課後博物館」（浜口哲一、2000、放課後博物館へようこそ）を標榜する平塚市博物館、遠隔地で高校生のたまり場となっている地方博物館などもあり、子どもの居場所としての博物館は地方や小規模館実践されている。他方、都市部での底辺者の包摂は未遂と思われる。

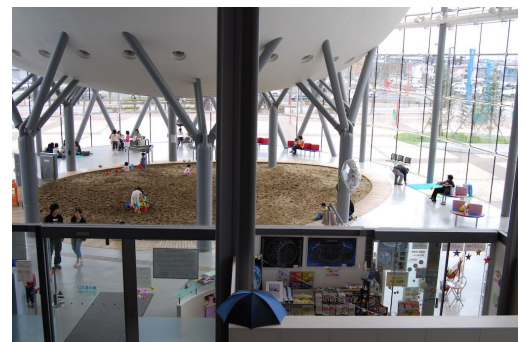
放課後博物館へようこそ—平塚市博物館の活動から（札幌市博物館活動センターニュースレター No.15, 2003）

<https://www.city.sapporo.jp/museum/museletter/documents/muse15.pdf> 後のページに添付

6. 子どもの博物館

1) 子どものための展示

子ども向けの展示の要点には、予備知識が不要、目の前の現象で楽しい、さわる触れる、といった点がある。前述のとおり体験型の展示がよるこばれる。文章や知識よりも身体で感じて納得するような展示である。このような展示は科学館が得意とする物理学分野の力学や電気、化学変化などでは容易であるが、生物多様性や歴史では困難かも知れない。生物分野では拡大模型の操縦、歴史や人文系では衣装の着用などがおもな体験型の展示だろう。動物園での体験は「ふれあい動物園」に見られるおとなしい小動物の抱きかかえ、給餌などの飼育体験、水族館ではタッチプールや餌やりとなる。タッチプールでは安全で接触到強いヒトデやナマコなどの棘皮動物やサメの仲間（板鰓類）が用いられることが多い。



2) 子どものための博物館

代表的な子どもに向けた博物館に科学館がある。科学館は展示装置による物理現象の再現を主眼とする。これは、予備知識無しに楽しむ。理科の内容にも合致した学習施設でもあり、代表的な子どものための博物館といえる。

英語圏では children's museum、日本語でも少数であるがチルドレンズ・ミュージアムと名乗る施設もある。釧路市こども遊学館は科学館に砂場を設け、一般の科学館よりも低年齢に向けた内容にした。北海道では冬は積雪と凍結で砂遊びができないため好評で、英語名称は Kushiro Children's Museum。公式サイト <http://www.kodomoyugakukan.jp>

一般向けの博物館では、子ども向けの展示室「ディスカバリー・ルーム」discovery roomを設けることがある。その内部の空間は原色の色使い、親しみやすいキャラクターの多用といった特徴が見られる。

スミソニアン協会自然史博物館のディスカバリー・ルームのバーチャルツアー https://naturalhistory2.si.edu/vt3/NMNH/z_NMNH-030.html



上：釧路市こども遊学館の砂場

下：スミソニアン協会自然史博物館のディスカバリー・ルームは実験室的

【前回の補充】 3. 教育方法の考え

1) 系統主義（科学主義）と経験主義（生活主義）

系統主義とは、一般的には経験主義に対する概念として、知識・理解や技能の「系統」を重視する教育の立場を意味する。すなわち、学校で教える教育内容は、科学や学問の成果であるべきだとし、それらについて段階を追って系統的に指導するという考え方。

経験主義の立場は、生活科や総合的な学習時間において、児童・生徒の発想を生かしながら、課題に対して体験的な学習を展開して、必要な事項を身に付けさせようとする考え方。

実際には、両者が一体となって教育の成果を上げていくという考え方が一般的。

東京教育研究所：系統主義 <https://touken.tokyo-shoseki.co.jp/keyword/53>

2) 構成主義 ↔ 欠如主義

正解を直接暗記するのではなく、学習者が正しい事柄を主体的に学びとるという考え。学習とは正解という客観的事実の注入という考えを「教授主義」（客観主義）といい、それに対抗する考え方。下のウィキペディアの例はわかりやすい。

従来は単語や文法を教師が一方的に説明し、学習者はそれを理解して暗記するのが教育であったが、文法であれば構成主義の立場からは以下のような手法が採用される。

教師が特定の文型を使った文を提示する。

その中には文法的に正しいもの正しくないものが含まれている。

教師はどの文が正しく、どの文が正しくないかだけ示す。

学習者はそこから文法的に正しくなる要件を見つけ出す。

思考としては納得できるものであり、他者理解の手助けにもなる。博物館教育の関係者のなかには構成主義を過剰に主張する人たちも見られるが、構成主義は考え方のヒントとして理解しておけば十分。

構成主義（教育） - Wikipedia [https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A7%8B%E6%88%90%E4%B8%BB%E7%BE%A9_\(%E6%95%99%E8%82%B2\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A7%8B%E6%88%90%E4%B8%BB%E7%BE%A9_(%E6%95%99%E8%82%B2))

放課後博物館へようこそ ～平塚市博物館の活動から～

お話し：浜口 哲一 さん (平塚市博物館学芸員)

* 2003年1月12日開催 博物館講演会の講演収録 抜粋

■目指すは「地域型博物館」

平塚市は神奈川県のおぼ中央、相模平野の南部に位置する首都圏のベッドタウンです。都市化が進んだ地域と自然が多く残る農村部が共存しています。このまちで1960年代末に博物館をつくる話がもち上がり、71年に博物館準備室が設置されて、どんな博物館にするのか大いに議論しました。「誰が利用する博物館か」「何を扱う博物館か」。その結果、平塚の博物館は、地域に暮らす人たちが、地域を見直す手がかりになるような「地域型の博物館」を目指そうということになりました。

■活動を支える大きな力

こうして地域の再発見をテーマに掲げて76年に博物館を開館しました。開館当初から市民参加について積極的に考えていたわけではなかったのですが、活動を始めてみると、博物館の事業は、一方的に利用者にサービスしたり、楽しんでもらうだけではなく、参加者と一緒に大きな仕事をやれることが分かってきました。

例えば、「漂着物を拾う会」では、貝に詳しい方が中心となって海岸で拾った貝の種類をリストアップし目録を作りました。また、「相模川を歩く会」のメンバーは、5年かけて山梨県の山中湖の源流まで歩き継ぎ、さらに2年間補足調査をして見聞したことを300ページもの「相模川事典」にまとめ上げました。

市民参加型の調査もあります。「セミの抜け殻調べ」では、みんなで場所を分担して抜け殻を集め、セミの地図を作って展示しました。抜け殻の標本も多

数蓄積され、調査結果を「セミのぬけがら調べ」と題する刊行物にまとめました。その後この調査は、近隣地域のグループや博物館とも共同調査をやるくりに発展していきました。

また「神奈川県植物誌調査」の場合は、神奈川県内の自然史系博物館との共同プロジェクトで県内の植物相をまとめた本をつくるための調査を行いました。「植物誌調査会」という200人ぐらいの市民グループが、自分の住んでいる地域の博物館をベースキャンプにして現地調査に出かけ、集めた標本を整理しました。このプロジェクトは、79年から始めて20年くらい活動していますが、88年に約1400ページの「神奈川県植物誌1988」を刊行し、その後、また調査をして、2冊目の「神奈川県植物誌2001」を出版しました。

このように「館主体の行事」から「会員制行事を通じた地域のフィールドワーク」へと活動を広げて、その成果を本や展示として結晶させることができました。博物館のスタッフだけではできないことも、みんなの力を合わせることで可能になるということに身に染みて感じるようになりました。

博物館としては、ボランティアが活動拠点として動きやすいような体制を整えるとか、学芸員自身もその調査員の一人となって動くとか、標本の情報を集約して、県の博物館に大きなデータベースをつくるとか、そういうことをやってきました。

(次ページにつづく)

■放課後博物館と遠足博物館

このようにいろいろな活動を積み重ねてくると、私も含めて館のスタッフの博物館に対する見方がだんだん変わってきました。突きつめていうと、博物館は「放課後博物館」と「遠足博物館」の2つのタイプに分けられるのではないかと考えています。

放課後博物館は、何かを調べに行く、行事に参加する、ボランティアとして手伝いに行く、遊びに行く、そういう日常的な使い方をする博物館をいいます。利用の仕方もさまざまな形があります。そこは、ありふれたもの、今まで見落としてきたものに気づくとか、何げなく見ていたものに新しい意味を見つけるとか、そういう楽しみがある博物館だと思っています。そのためには入場無料で、いつでも、誰でも、自由に出入りできることが、放課後博物館にはすごく大事だと思います。

これに対して、一生に一度、あるいは年に一度行く、そういう使い方をする博物館を遠足博物館と名づけました。どちらかというと、遠足博物館は、展示を見ることが利用の中心で、普段見られない珍しいものに出会うことができたり、日頃できないような経験が積めるといったように非日常的な楽しみがある博物館です。

誤解のないように付け加えますが、放課後博物館がすぐれた博物館で、遠足博物館は古くさいと言っているわけではありません。遠足博物館と放課後博物館は、博物館の両輪だと考えています。放課後博物館が果たせる役割もあるし、一方で、遠足博物館でなければ果たせない役目もあって、それぞれが両立

して初めて良い博物館環境ができると考えています。ただ、市町村の場合は、そこに暮らしている人やそこで育っている子供達にとって大きな意味のあるような放課後博物館を活動のベースにしてほしいな、と思っています。

■地域に生きる博物館

最近、平塚では、博物館の活動が地域にいろいろな影響を及ぼす機会が増えてきました。一昨年、市が策定した環境基本計画には、博物館が今まで市民参加で調べてきた地域のいろいろな自然環境の情報が、生かされたとはまでは言えないかもしれませんが、一応、取り上げられて話題になりました。また、かつて平塚に暮らしていた文人「村井弦齋^{げんさい}」を博物館の特別展で取り上げたところ、商店街が彼にちなんだ名物カレーやそばの特別メニューをつくって売り出すなど、博物館がまちおこしのきっかけをつくることになりました。

このように博物館の活動を通して、個々の市民だけではなく、商店街や青年会議所など、地域社会のいろいろな組織や団体とのつながりが深まってきたと感じています。博物館の存在意義がそのあたりにもあるのではないかと思います。平塚の博物館が、単に博物館の世界のことだけではなく、地域社会における役割も視野に入れて活動していると理解していただけたらうれしいと思います。

もっとお話をしなければ分りにくいところもあつたと思いますが、お約束の時間になりましたので、ここで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。



▲ 講演後には来場のみなさんと「札幌型の市民参加博物館」について、自由な博物館談義が盛り上がりしました。

講座・体験学習会・企画展のお知らせ 5月3日(土・祝)開館!

① 博物館体験学習会 タンポポを知りつくす! ~春の植物観察会~

日時 5月24日(土) 午前10時~12時 **会場** リンケージプラザ前庭および博物館活動センター実習室
対象 小学生~大人 **定員・費用** 20名 無料 **講師** 山崎 真実 (札幌市博物館活動センター学芸員)

② 博物館体験学習会 化石採取会

日時 6月21日(土) 午前8時30分~午後4時30分 **会場** 滝川市空知川
対象 小学4年~大人 **定員・費用** 40名 無料 **講師** 古沢 仁 (札幌市博物館活動センター学芸員)

③ 博物館体験学習会 水生昆虫観察会

日時 6月22日(日) 午前9時~午後2時 **会場** 豊平川上流
対象 小学4年~大人 **定員・費用** 30名 無料 **講師** 斉藤 和範さん (旭川大学女子短期大学部非常勤講師)

参加する行事名・住所・氏名・年齢・電話番号・FAX番号を明記し、それぞれ①5月15日(木)、②6月10日(火)、③6月17日(火)、(①②③とも必着)までに博物館活動センターへハガキまたはファクス、Eメールmuseum@city.sapporo.jpにて申込。ホームページ<http://www.city.sapporo.jp/museum/>からも申し込みできます。いずれも多数時抽選。

第7回 iミュージアム企画展

「サッポロのふわふわ展」5月3日(土・祝)まで延長して展示します!!

第8回 iミュージアム企画展

野幌森林公園のアライグマ ~移入動物の現状と問題点~

開催期間:平成15年5月10日(土)~6月21日(土)

主催:アライグマ研究会、酪農学園大学獣医学部寄生虫学教室(野生動物学)、札幌市博物館活動センター
会場:iミュージアム・ギャラリー(博物館活動センター5階)

My Field マイフィールド さっぽろ

札幌市内・周辺を主なフィールドに自然観察等の野外活動を行っている個人・団体を紹介していきます。

昆虫少年の心で はやし みちこ 林 迪子 (札幌市環境教育リーダーEcokon 事務局長)

Ecokonは、環境教育リーダーの養成研修(札幌市主催)を修了した者の自主的な研修グループです。平均年齢はちょっと高めですが、草花や昆虫を観察する時の輝く眼は、少年少女そのものです。トンボの観察に最適な西岡水源池では、オオルリボシトンボを始め、たくさんのチョウや甲虫類に出会えて満足の日でした。種名を同定するだけでなく、昆虫をめぐる生態系を考える学習を今年度も計画的に行う予定です。

そして、身につけた力を学校の総合学習のお手伝いという形で発揮したいと張り切っています。



▲ 広場にヤンマが来てくれた

編集後記

来館者数 **12,264**人 (2003年3月末現在)

14号で取り上げたガマの穂ですが、その後読者や来館者の方々から情報をいただきました。ありがとうございました!(改訂版ガマの穂地図は第17号に掲載予定。)生育地の川底がさらわれてガマがなくなった、と再度電話くださった方も。その他、来館者の方からは戦時中はガマの穂綿を布団につめたという体験談もありました。展示室にいと、資料から引き出される子供から大人までそれぞれの世代の声を聞くことができました。(ま)



さっぽろ市
03-F09-03-136
15-2-9